塩田光喜編『オセアニアの知と権力』　調査研究報告書　アジア経済研究所　2008 年

第 3 章

聖霊の革命力と神権統治
－ソロモン諸島の独立教会をカリスマ論から読み解く－

石森 大知

要旨：　本稿の目的は、ソロモン諸島のクリスチャン・フェローシップ教会（CFC）の形成史をカリスマ論の視点から考察をおこなうとともに、同教会の教祖エトが依拠ないし創造した知識と権力構造を明らかにすることにある。ウェーバーのカリスマ論の特徴として、カリスマの革命力と日常化を指摘できる。教祖エトは聖書的知識に精通し、やがて神の啓示をとおして、聖霊を獲得したとされる。この聖霊は、CFC の信仰においてエトの資するカリスマとみなすことが可能である。エトが自在に操るという聖霊は、その革命力によって憑依現象および宗教的熱狂を巻き起こし、彼の名をニュージョージア島全域に轟かせた。しかし運動の伸展とともに、聖霊は、信徒たちの生活を見守る身近な霊的存在として日常的文脈に馴化されることとなった。それはまた、エトおよびその子息を行政的かつ宗教的な組織の頂点とする神権統治の出現とも軌を一にしていた。このような CFC の歴史的展開は、カリスマの革命力から日常化への変遷を示しているのである。

キーワード：　カリスマ概念、聖書と神の啓示、神権統治、クリスチャン・フェローシップ教会、ソロモン諸島

はじめに

ソロモン諸島のニュージョージア島にクリスチャン・フェローシップ教会（Christian Fellowship Church、以下、CFC）という独立教会がある。CFC は、イギリス植民地時代にメソジスト教会から分離し、財政や運営の面で西洋人に依拠することなく、独自の社会宗教的な活動を展開してきた。現在、この教会は、ウェスタン州ニュージョージア島の人口の３分の１を超える１万5000 人余りの信徒を抱え、かつての母教会であるメソジスト系ユナイテッド教会[1]の信徒数に肉薄している。今や CFC は、アングリカン系メラネシア教会、ローマンカトリック教会、南太平洋福音派教会、ユナイテッド教会、セブンスデー・アドベンチスト教会につぐ６番目の規模を有しており、ミッション系の主流派教会と肩を並べる存在となっている。

CFC の教祖は、ニュージョージア島出身の現地人説教師、サイラス・エト（Silas Eto）である。エトは、メソジスト教会の宣教本部で５年間の教育を受け、聖霊憑依の経験と神の啓示をとおして、「新しい生活（New Life）」を目指すという宗教運動を開始した。やがてエトの運動は、聖霊憑依の解釈をめぐって西洋人宣教団と対立し、紆余曲折を経て、1966 年に CFC として独立を果たした。とくに CFC の独立時において、その顕著な特徴は、聖霊の働きがもたらすという宗教的熱狂にあった。というのも、エトに付き従った人々は、聖霊憑依によって突き動かされ、また宗教的回心を経ることで、運動に参加したからである。それ以降、彼/彼女らは、自らの生活は「聖霊によって支配されている」と信じ、その点において CFC という教会の正当性を強調してきた。

本稿の目的は、教祖エトおよび聖霊の働きに焦点をあてつつ、CFC の形成史を明らかにすることである。そのさいに、ウェーバーのカリスマ論は、きわめて重要な示唆を与えてくれる。彼のいうカリスマ（charisma）とは、ある人物に宿っているとみなされる非日常的・超自然的・超人間的な資質・能力・状態を表す概念であり（ウェーバー 1970:70）、これはエトが獲得したと

いう「聖霊」に一致すると思われる。そもそもウェーバーによれば、カリスマという概念は新たに案出されたオリジナルなものではなく、原始キリスト教の用語法から借用されたものあり、「恩寵の賜物」である。彼は、古キリスト教団の教権制とカリスマ概念との関連を説明したのちに、この概念をキリスト教あるいは宗教に限らず、より広い意味で使用することを提案した（脇本 1979:4）。すなわち、聖霊は、まさにウェーバーのいうカリスマ概念の祖形ということができる。

カリスマ概念の特徴として、CFC の事例に引き付けて考えれば、つぎの２点を指摘できる。１つは、「カリスマの革命力」であり、もう１つは、「カリスマの日常化」である。まず前者について説明する。ウェーバーによれば、カリスマは現世一般に対する一切の態度のまったく新たな志向を生み出すことにより、人間に対して内面からの変革をもたらす。したがって一切のものを価値変革し、あらゆる伝統的または合理的規範に対して革命的態度をとるという。つぎに、「カリスマの日常化」である。カリスマ的支配が激烈な作用を演じるのは、原則としてその誕生期だけに限られている。この支配関係が、一時的かつ不安定なものにとどまらず、１つの永続的な関係の性格をもつようになると、カリスマ的支配の純粋性は破られて、やがて制度的なものに移し変えられていくという（ウェーバー 1970:75-80）。さらに、これらは独立した現象ではない。カリスマは、時間の経過とともに、その「革命力」から「日常化」へと宿命的な変遷をたどることが CFC の事例から示される。この変遷を精査することは、CFC が 70 年以上にわたって、相当の規模と影響力を発揮し存立してきたことを理解する手がかりとなるはずである。

以上のような問題意識のもと、本稿では、CFC の形成史を描写するとともに、エトがいかにして聖霊を獲得したと人々の前で証し、そのようなものとして承認されたのかを明らかにする。その後で、エトはどのような知識に依拠して運動を展開したのか、そして結果的に CFC はいかなる権力構造を創出したのかについて考察をおこなう[2]。

第 1 節　サイラス・エトとキリスト教の邂逅

CFC の教祖エトは、1905 年に北ニュージョージアのカリコロ（Kalikolo）に生まれた。この地域にメソジスト教会の宣教団が到来したのは、エトの誕生から 10 年が経過した 1915 年のことであった。エトは、幼少からキリスト教に強い関心を示し、1923 年に現地人説教師からの推薦をもって若くして洗礼を受けたとされる。その後、エトはつぎのような神秘的な出来事をとおして、キリスト教の神の力を経験することになったという。

エトは自身の些細な不注意でトカゲを殺してしまった。それはカリコロの伝統的慣行で禁じられているばかりか、動物を殺すと地獄に落ちると説いていたというキリスト教の教えにも反する行為であった。エトは自身の不注意による生命の死を深く悔やみ、トカゲの復活を試みた。はじめに、伝統的信仰に基づく手法を用いてトカゲの復活を試みたが失敗に終わった。つぎに、キリスト教の神に祈りを捧げるとトカゲは生き返り、森のなかに去っていった。エトは、この経験をとおして、キリスト教が伝統的信仰より優位にあることを認め、神に祈ればそれに神は答えてくれることを知ったという。

それから数年後のある日、エトは畑仕事を終え、自分の家で休憩しているとき、再び不思議な経験をした。突然、家が横に揺れはじめ、輝く光がどこからともなく差し込んできた。エトは、あまりの眩しさに思わず目を閉じた。恐る恐る目を開けると、輝く光のなかに、１人の男性が立っているのがみえた。男性は、やさしく微笑みながら、１本の細くて白い糸をエトに手渡し、「この白い糸を食べなさい」と語りかけてきた。エトは、その言葉に従って白い糸を呑み込んだ。男性は「これで、あなたは聖霊を手に入れたのだ」と言い残し、その場から去っていったという。なお、エトが聖霊を獲得したという話は複数存在しており、上記はそのうちの１つである。

1927 年、22 歳になったエトは、宣教団の指示を受けて、ニュージョージア島の南西部に位置するメソジスト教会の宣教本部に向かった。当初、エトは、西洋人と同等の生活が手に入るという期待に満ちていたという。なぜなら、

西洋人がもたらしたキリスト教は、「神のもとですべての人々は平等である」という教えを説いてきたからである。しかし、このような思惑とは裏腹に、エトは、宣教本部にて生活を送るなかで、ソロモン人と西洋人の不均衡な地位関係を強く認識することとなった。エトの回顧によれば、宣教本部におけるソロモン人と西洋人の関係は「命令される者（働く者）」と「命令する者」にほかならず、この関係は揺るがしがたいものであった。また、彼は西洋的文物を生み出す「西洋人の知識」が授けられることを期待していたにもかかわらず、それらしきものを教わることはなく、その代わりに教会が運営する農園で労働に従事させられたのである。すなわち、エトは宣教団の指示に忠実に従った生活を送ったところで、彼が思い描いていたようなソロモン人と西洋人の関係を構築することはできなかったといえる。

その一方で、エトは自らが抱いた劣等感を振り払うかのように、ひたすらキリスト教の神に祈りをおこなうようになった。１人で山に入り、労働活動やミッション・スクールおよびそのほかの雑務に課される時間を除き、朝から晩まですべての時間を祈りに費やした。いつしか彼には、西洋人宣教師や島の人々から、「祈りを捧げる者」という呼び名が与えられるようになったという。

そのような状況下、エトはその後の人生を左右する出来事を経験する。エトの回顧によれば、それはつぎのようなものであった。ある日、いつものように祈りをおこなっていたエトは、体が張り裂けんばかりの轟音を聞くとともに、「輝かしい光のなか、花と子どもたちで溢れたとても美しい景色」をみた。「私がそれをみたとき、体のすべての部分が揺れた。足の先から髪の先まで、そして体の内部に至るまで、喜びを感じた。私は、聖霊が自分の体のなかに入り込み、喜びに満たしていくのを感じることができた。」さらに、そのとき、エトは、つぎのような神の啓示を受けたという。「おまえは生まれ変わらないといけない。ホーリー・ママ（Holy Mama）として変わるのだ。そして、ホーリー・ママも再び生まれ変わる。ホーリー・ママは聖霊のように生きなければならない。ホーリー・ママは『新しい生活』を生きなければなら

ない。ホーリー・ママの心のなかにジーザス・クライストが入り込むであろう。」

ホーリー・ママとは、英語のホーリーと、現地語（クサゲ語）として用いられているママの混生語である。それを直訳すれば「神聖なる父」を意味するが、神の啓示に従えば、それはほかでもないエトのことを指していた。エトは、自らがホーリー・ママとして生まれ変わって「新しい生活」に到達し、やがて指導者となって人々をそこに導く役目を仰せつかったという具合に解釈したという。

第 2 節　聖霊の働きと宗教的熱狂

1932 年、エトは５年間を宣教本部で過ごした後、「神からの応答として聖霊を授かった」という確信を胸に秘め、北ニュージョージアに戻った。そしてエトは、自らが宣教本部で経験した神秘的な出来事などを熱心に説いて回ったという。彼は、毎朝のように多くの人々を集めて「祈りの集団」を組織し、キリスト教の神に対する祈りの大切さを説き、日常生活のあらゆる機会に祈りに献身することを熱心に主張したとされる。さらに、いくつかの個人的なエピソードを交えながら、キリスト教は伝統的信仰よりも優れており、その神に祈りを捧げれば祝福として聖霊が訪れること、さらには、その聖霊が体のなかに入り込むことによってその者は新たに生まれ変わり、喜びや幸せに満ちた生活を迎えることができると語っていたという。こうして、エトに従って熱心に祈りを続ければ、自分たちにも聖霊が訪れるのではないかという風潮が形成されていった。

それから暫くして、エトの説教を聞いた人々のなかには、聖霊憑依の状態、すなわち現地語でいうタカモエ（*takamoe*）に陥る者が続出した。タカモエとは、ある人物に外在する霊的存在が身体に入り込み、その人物の行動を支配することで激しい痙攣、発作、号泣などを引き起こし、ときには何かを口走るという憑依型のトランスおよびそれに情緒的感情が付加された状態を意味

する。タカモエが起こるのは、説教や賛美歌の斉唱がおこなわれているときである。すすり泣きからはじまり、痙攣を引き起こし、エトを称揚する言葉や奇声を発するなどがその典型であった。なかには、立ち上がって踊りだす、家の壁をよじ登る、柱を壊そうとする、などの反応を示す者もいた。後ろに倒れて後頭部を強打したり、家の壁や屋根から転落する者までいたが、体に傷を負うことはなかった。また、突然に「流暢な英語」や「聞いたこともない言葉」を語りはじめる者もいたとされる。誰か１人がタカモエになると、老若男女を問わず他の人々にも影響を与え、教会内にいるすべての人々がタカモエになることも珍しくなかったという。

1940 年代から 50 年代、ニュージョージア島の各所でタカモエが頻繁に発生すると、人々はタカモエに関する説明を求めてエトの来訪を望んだ。エトは忙しく村落間をカヌーで移動し、タカモエを鎮めるとともに、自らから発せられる聖霊によってタカモエが引き起こされていることを触れて回った。ひとたびタカモエが起これば、当該村落に居住するすべての人々が集団的にタカモエとなり、そのままエトの信奉者となることが多かった。そのうち、誰が吹聴するでもなく、エトは体に聖霊を取り込むことで聖霊を獲得し、それを自由に操ることができると実しやかに噂されるようになったという。

たとえば、筆者が調査をおこなってきた北ニュージョージアのパラダイス村（同村については後述）の年長者は、同村で集団的なタカモエが初めて起こった日、すなわち「聖霊の日」と現在に語り継がれている日の出来事を、以下のように回顧する。

「その日、ママ（エト）が説教をおこなっているとき（…中略…）、その場に居合わせたすべての人々がタカモエになった。はじめに数人の老人がタカモエになり、彼らは、英語で神に関することを語りはじめた。英語だけではない。われわれの知らない、どこかほかの場所の言葉を話す者もいた。聖書に書かれているように、タカモエになった人々は異なる言葉を話したのである。そのとき、私も心がとても熱くなり、タカモエになった。私が、どの

ような行動をとったのかはまったく覚えていない。自分の体に何が起こったのかわからないが、心がとても熱くなったということを強く覚えている。焼けてしまうほどの熱さだった。私の幻想のなかで、ママが突然に現れたかと思うと、彼は私の目の前に立ち、『恐れることはない。聖霊がおまえに到達したのだ」とだけ言って消えてしまった。（…中略…）その後、ママは、われわれを前にして「これは聖霊によるタカモエである。聖霊がこの地に到来したのだ。聖霊があなたたちを支配している』と語ったのである。」（男性、1927年生まれ）

以上のような語りは、タカモエの経験を説明するさいの典型例である。タカモエの状態から人々を解放できるのは、エトただ一人であった。エトは、タカモエになっている人々に近づき、彼/彼女らの頭を軽く触るか、あるいは手をかざしながら巡回したという。あるときには、エトが「静まれ」と告げると、それまで泣き叫んでいた人々は嘘のようにおさまった。タカモエから覚めた人々は、聖霊を操っているのはエトであり、自分がエトから選ばれて聖霊がもたらされたことを知るという。こうしてエトは信奉者を獲得し、「新しい生活」の実現に向けて宗教運動を組織するのである。

第3節　「新しい生活」を目指して

3-1　パラダイス村の創出

エトによれば、タカモエになった人々は神に選ばれた人々である。これらの人々は、既存の生活における悪い行いから解放され、新たに生まれ変わることで「新しい生活」に到達する道がひらける。そのためにエトがまず着手したのは、それに相応しい聖なる地、「パラダイス」を創出することであった。これは文字通り、パラダイスという名称の村落を北ニュージョージアの地理的中心に建設するという形で実行に移され、1957年から３年間の歳月を費や

して完成した。集団的なタカモエの発生およびエトの到来から数年しか経過していなかった当時、人々が関心を抱いたのは「労働」と「教会」の２つのことだけであり、喜び勇んで労働に従事する一方、寝る間を惜しんで教会活動に明け暮れたという。このように、パラダイス村の建設は、まさに聖霊がもたらした宗教的熱狂のなかでおこなわれたのである。

パラダイス村は、現在においてもソロモン諸島の村落部で最大級の人口規模を誇ることに加え、その村落景観、空間利用、建物の形態や並び方などは従来にない斬新なものばかりであった。これらは、既存の事象とは異なる「新しいもの」と位置づけられ、過去との断絶が強調された。この村は、「一般信徒の居住区域」、「教会とエトの居住区域」、「学校と診療所の区域」という３つの区域から構成される。「一般信徒の居住区域」は、さらに「（昼の）活動の場」と「（夜の）眠る場」に分けられ、それぞれの場には禁忌行為が定められるとともに、一定の時間以外に２つの場を往来することは厳しく禁じられている。２つの場を区切る境界線上には柵と出入り口が設けられ、不法に往来する者を取り締まる見張り人が巡回した。柵の内側に「眠る場」、外側に「活動の場」があり、それぞれ「寝るための家」、「炊事の家」が建っている。これらは人々が生活を送る家屋であり、「教会とエトの居住区域」を頂点として、等間隔を保ちながらＶ字型を描いて整列している。

「教会とエトの居住区域」には、教会建物およびエトの家が建てられ、教会関連行事や特別な用事がない限り、人々の立ち入りは禁じられた。教会はソロモン諸島で最大のリーフ・ハウスといわれており、1000 人以上を収容することできる。教会にはエトの控え室と彼が儀礼で用いる小道具をおさめる部屋が併設された。エトの家がある一画は、エトとその家族、すなわち「神聖なる家族」と呼ばれる人々が生活を送る場であり、大きな家が建ち並び、運動の旗が掲げられるなど、「一般信徒の居住区域」とは異なる雰囲気を醸し出している。さらに、「学校と診療所の区域」はＶ字型に並ぶ家々のラインから外れた海岸沿いに設けられ、時間制限はあるものの、いわば公共の場として人々は自由に立ち入ることができる。そこには幼稚園、小学校、運動場

および診療所のほか、後にエトの教えを広めるための「ミッション・スクール」がつくられた。

パラダイス村の完成は、エトおよび聖霊の力を証明し、運動の拡大にも多大な貢献を果たした。この村落では、既存の親族的紐帯を超える人々による集団生活が営まれ、共同労働のための大規模な農園がつくられた。農園では、現金獲得を目的とし、ココヤシにはじまり、ニュージョージア島の他地域に先駆けてココア、ライスなどの栽培および植林活動が積極的に推進された。これらの経済活動は、西洋人を驚嘆させるほどの成功を収めた。たとえば、パラダイス村近郊のココヤシ農園は、その最盛期において、約 8 平方キロメートルの規模を誇ったという（Tuza 1979:9）。やがて運動は、第二次世界大戦がもたらした政治的空白に乗じ、ニュージョージア島全域および周辺の島々にまで拡大した。その勢いに脅威を感じたメソジスト教会の宣教団は、「エトの運動は悪霊の仕業である」とする文書を各村落に配布し、エトを煽動罪で逮捕するなどの措置を講じた。これらの仕打ちをきっかけにして、エトは反西洋人的な主張を強め、メソジスト教会から分離することを望んだ。そして 1966 年、紆余曲折を経ながらも、植民地政府からの承認を取り付け、CFC として独立を果たしたのである。

3-2　CFC 誕生と運動の制度化

エトの運動では、彼の個人的資質に依拠するところが大きく、あらゆる事象が彼一人を中心に回ってきた。各村落に指示を出すのがエトであれば、その具体的内容を思案するのもエトであった。エトを支える官僚的な役割を担う者や聖職者は皆無ではなかったが、彼らはエトの影に隠れた裏方的な存在であり、正式に任命されていた訳でもなかった。また、人々はエトに対する忠誠を誓い、聖霊を受けたというある種の選民意識を共有していたが、運動の全体を鳥瞰すれば、緩やかにまとまっていたに過ぎなかった。すなわち、エトと各村落（あるいはエトと各個人）の関係は経験的に構築されていた反

面、各村落や個人を互いに結びつけ、全体を統合する組織や制度は存在していなかったのである。

そこでエトは、独立にさいして、メソジスト教会の教区制度と聖職者二職制に目をつけた。メソジスト教会の宣教団は、ニュージョージア島の諸社会を一方的に分割し、恣意的な境界線に基づいて教区制度を布いていた。この教区制度に依拠する形で、CFC に帰依するすべての村落は５つの教区に分類されたのである。さらに、聖職者についても、メソジスト教会のミッション・スクールで教育を受けた者を対象に牧師と信徒牧師の二職制が導入された。牧師は基本的に１つの教区に１人であり、信徒牧師は村落規模に応じて 3 人から 6 人が任命された。信徒牧師は、洗礼式の執行ができない以外、ほぼ牧師と同じ職務を担い、各村落における教会活動を主導した。それぞれの教区では、牧師を議長とする教区会議が設置され、年に４回の四季会が召集されることとなった。これらはメソジスト特有の伝道牧会制度そのものであり、エトは宣教団が半世紀をかけて構築したものをそのまま継承したということができる。

その後に構築された CFC の官僚的な制度は、まさに近代国家を連想させるものである。その中核となるのは、教会評議会、開発・財務計画評議会、教育評議会という３つの評議会である。各評議会を取り仕切る議長の座はエトの息子たちで占められ、教会評議会は次男、教育評議会は三男、開発・財務計画評議会は四男がそれぞれ議長となった。まず教会評議会は、宗教的および精神的側面の全般を監督する機関であり、それには信仰、倫理、規範、法、義務などが含まれる。教育評議会は、幼稚園、小学準備学校、小学校、中高等学校などを運営し、正しい CFC 信徒に育てるための教育方針を策定し、それを現場で実施することにある。さらに、開発・財務計画評議会が果たす役割は、教会が所有する資産の管理および予算の配分をおこなうとともに、各村落で実施する開発計画を具体的な形で提示し、それを一般信徒に履行させることにある。これらの３つの評議会は、それぞれ長官と次官、秘書、委員など多くの役職を抱え、CFC の教会運営を担っている。

さらには、聖霊の働きさえも、制度化の様相を呈している。CFC の成立以降、タカモエは、それ以前のように集団的に激しく生じることは稀になり、影を潜めるようになった。CFC 信徒によれば、タカモエは、人々を危険な霊的状態におくばかりか、寝食をしない状態を数日間も続けさせることがあったという。そのため、エトは、タカモエが頻繁に起こらないよう聖霊を操作したというのである。しかし、このことは聖霊の消滅を意味する訳ではない。エトは、聖霊を、人々に憑依させる代わりに、アロソ[3]（*aroso*）と呼ばれる「聖霊の宿るロープ」に宿したという。これは、エトが何気なく置いてあった１本のロープを拾いあげ、聖霊を注入したことに由来するとされる。以後、パラダイス村では、すべての住居の入口付近に「聖霊の宿るロープ」を祀る建造物が立てられた。こうして、かつて人々を熱狂の渦に巻き込んだ聖霊は、今や日常的文脈に位置づけられ、より身近な霊的存在となったのである。

第 4 節　考察

4-1　CFC とカリスマ概念

ここまで CFC の形成史を概観してきた。エトは、聖霊を獲得し、やがて彼自身がそれと同一視すべき神聖な存在として信仰対象となったといえる。このことを例証するように、エトは、「神、子、聖霊」に続く４番目の位格として加えた「四位一体」と解釈されることがある。たとえば、つぎのようにいう者がいる。「聖書に書かれている３つの存在（神、子、聖霊）と、ママ（エト）は、同じである。これらの４つは、１つの存在である。ただし、われわれ生きた人間を助けることができるのは、４番目の存在だけである。この４番目の存在こそが、そのほかの３つの存在の言葉をわれわれ生きた人間に対して語ってくれるのである」（男性、1934 年生まれ）。この者は、三位一体の位格とエトは同一存在であり、４つが１つの神格を形成すると考えているのである。

それでは、CFC における聖霊の位置づけは、ウェーバーのカリスマ概念との関連でどのように考察可能であろうか。以下では、本稿の冒頭で指摘した２つの点、すなわちカリスマの「革命力」と「日常化」について考察する。

はじめに、「カリスマの革命力」についてである。CFC において、エトおよび聖霊は、まず人々の内面からの変革をもたらした。タカモエになった人々は、総じて、その経験を「心が熱くなる」と語り、やがて言葉では表現できないほどの幸福感に包まれるという。彼/彼女らによれば、聖霊が心のなかに到達し、これまでに自らが働いた悪い行い、すなわち嫉妬、喧嘩、悪い噂、盗みなどの罪をすべて洗い流すとともに、悔い改めることを要求するという。その後で、自分のすべてが生まれ変わったとか、それ以降の自分の態度や生き方が変わったなどと語る。こうして人々は新たに生まれ変わり、エトの指導のもとでパラダイス村の建設に従事した。たとえば、同村に住む人によれば、「パラダイス村の建設時は、労働に疲れることなく、嫌になることもなく、ひたすら働いた。ホーリー・ママの命令のみを喜んで実行した。食事をしなくても、空腹になることはなかった。なぜなら、聖霊に満たされていたからである」という。やがて完成したパラダイス村では、既存の親族的紐帯を超える人々が共同生活を営み、かつての伝統的権威のもとではなく、エトのもとで、「新しい生活」に向けての取り組みがはじまったのである。これらのことは、聖霊というカリスマの革命力の発露ということができる。

もう１つは、「カリスマの日常化」についてである。運動の萌芽期において、エトおよび聖霊の存在は、現世離脱的かつ非日常的であり、すぐれて不安的であったといえる。そもそもウェーバーの強調点は、カリスマの非日常性であり、それがゆえに、カリスマは情緒的帰依を生むのである。しかし、それはやがて伝統化、合理化、制度化していくという（ウェーバー 1970:70-80）。上述のように、CFC の分離・独立から暫くして、聖霊は「聖霊の宿るロープ」という、いわば制度化された安定的な形で可視化された。それ以降、人々はこのロープを祀る建造物を村落各所に設置し、その「揺れ」をみる度に聖霊の存在を確認しながら生活を送っている。このような状況下、聖霊は、かつ

てのように熱狂や変革をもたらす存在というよりも、日常的に庇護や安息を与える存在になったといえる。これはカリスマ論によれば、「カリスマの日常化が起こり、制度的なものに移され、日常の永続的所有物に転化」した事例として説明可能である（脇本 1979:14）。すなわち、「聖霊の宿るロープ」の出現は、変革力をもつ存在であった聖霊を日常的文脈に馴化するという意味で、まさに「カリスマの日常化」を示す事例と考えることができる。

4-2　知識と権力構造

つぎに、エトは、カリスマ的な支配者として人々に承認される過程で、どのような知識に基づいてその証しをおこない、そして最終的にいかなる権力構造を創出したのかという点について考察する。

エトの依拠した知識は、２つに大別される。１つは聖書であり、もう１つは神の啓示である。まず聖書に関してである。エトは、たとえば、聖書に基づいてタカモエを説明する。彼によれば、タカモエは、キリスト復活後の最初の聖霊降臨を描写した使徒言行録の第２章に求められる。同箇所には、五旬祭の日に天から「炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまり」、「一同は聖霊に満たされ、霊が語らせるままに、ほかの言葉で話し出した」（使徒言行録 2:3-4）と記されている[4]。かつて聖書に描かれた世界は、北ニュージョージアの人々にとって遠い過去に遠い国で起こった出来事に過ぎず、祖先や自分たちが生きる世界とは無関係と考えられていた。やがて登場したエトは、タカモエが聖霊の働きによって起こることを告げ、人々の現実と聖書の世界を接合したのである。さらにエトによれば、キリストの命を受けて地上に遣わされた使徒の宣教を導くのは弁護者、すなわち聖霊である。そして、ヨハネの福音書に記されたキリストの言葉が実現したのが、使徒言行録の聖霊降臨であるという。それはまた、CFC におけるタカモエと同一視される。この福音書に記されたキリストの言葉を経由して、タカモエは、キリストの弁護者として遣わされた聖霊の働きによって起こったと説明されて

きた。その結果として、聖霊こそが CFC 誕生の原動力となったという理解にもつながっていくことになる。

また、エトは、西洋人宣教団との神学的論争においても、聖書の成句を頻繁に引用することで、自らの運動における宗教的行為の正当性を主張した。たとえば、エトの運動で礼拝中におこなわれる手拍子と掛け声は騒々しいものであり、キリスト教の礼拝様式から逸脱していると宣教団から批判されたことがある。エトは、この件でメソジスト教会の宗教会議に召喚されたさいに、「聖書には、『すべての民よ、手を打ち鳴らせ。神に向かって喜びを歌い、叫びをあげよ（Psalm 47:1）』と書かれており、自分たちはそれに従って礼拝をおこなっているだけである」と反論した。さらには、「聖書に書かれていることを実行して何が悪いのか、それとも聖書には嘘が書かれているというのか」などと主張したという。また同様の手法で、CFC における聖霊の働きやタカモエについても、その正当性を訴えた。最終的に、宣教団はエトに返す言葉がなく、「今後はあまり激しい礼拝をおこなわないように」と注意を与えるにとどまったという（Tippett 1967:221）。

一方、神の啓示についてである。エトの回顧によれば、CFC 誕生に至る重要な転換点には必ずといって良いほど、神が現れてエトに啓示を与えてきた。たとえば、エトは「白い糸」を授かると同時に啓示を受けているし、ホーリー・ママとして生まれ変わること、そして人々を「新しい生活」に導くことなど、すべて神の啓示のなかで語られたことである。さらに、エトによれば、パラダイス創出もつぎのような神の啓示に基づいている。「おまえは聖霊とともに、メナカサパ（北ニュージョージアの地名）を地球上のパラダイスとして改革しなさい。そして、聖霊の力はパラダイスからはじまり、それ以降 2000 年にわたってその力が保証されるだろう。」しかし、神の啓示は、運動の萌芽期には多く語られていたとされるものの、CFC の成立以降、徐々にその回数が減少したことが指摘できる。このことは、エト自身が神と同一視すべき存在に昇華したことに関係すると思われる。というのも、啓示とは神が神自身や超自然的存在を介して人間には不可知の宗教的心理を人間に伝達すること

であり、もしエトが神と同一存在であるとすれば、啓示はおのずとその役割を終えると想像されるからである。

以上のように、エトの知識は、聖書と神の啓示という、いずれもキリスト教的枠組みに依拠するものであった。ここでキリスト教とメラネシアの伝統的信仰の顕著な相違の１つに、前者は一神教であるという点があげられよう。エトは、キリスト教が提示する全知全能の唯一神のイメージを強調する一方、聖霊を媒介とすることで自らを三位一体の位格に比肩する存在として接近をはかったといえる。いうまでもなく、キリスト教の三位一体論は、唯一神が異なる姿をとって現れるものの元来は一体とする教理であり、一神教の枠からはみ出すものではない。そこでエトは、自らが三位一体の位格と同等の存在として、あるいは四位一体論とでもいうべき教理を創出することによって、一神教的な絶対的存在となることに成功した。それと同時に、エトは、一神教的宗教の伝統にのっとる形で、神と信徒個人との直接的な関係を尊重する一方で信徒間の平等性を強調してきたが、これは裏を返せば、神と信徒の完全なる断絶の強調でもあったということができる。

２つ目に、CFC で創出された権力構造についてである。これは、すでに述べた「カリスマの日常化」の問題とも深く関係している。当初、エトは聖霊を人々にもたらした存在として熱狂的に受容される一方で、その地位は定まっていた訳ではない。この時点でのエトは、メラネシア地域で無数に生起した千年王国的運動の預言者と同様に、きわめて不安的な存在であったといえる。その後、CFC 誕生とともに、エトは、ホーリー・ママという「聖霊を人々に開示した存在」として成文化された（CFC 1965）。ただし、CFC における指導者の地位がより明確に制度化されたのは、エトの死後である。

エトは 1983 年に死去し、その後、7 年間の紆余曲折を経て、彼の次男であるイカン・ロヴェ（Ikan Rove）が指導者となった。現在、イカンはスピリチュアル・オーソリティー（Spiritual Authority, 以下、SA）と呼ばれているが、これはホーリー・ママを継承する者にのみ与えられる「称号（title）」であるという。SA としてのイカンの登場と同時に、「CFC の法（90 年の法）」が新

たに編纂され、そこにおいて、この称号はすべての霊的存在を支配する権威という意味が込められており、「会衆を霊的に導くことができる」ことを裏打ちするものとされた。さらに、SA は、CFC の頂点に位置する絶対的存在であり、「CFC という宗教共同体およびその信徒に関するすべての事象について権限をもつ」と明記された（CFC 1990:4）。これは、ウェーバーの言葉を借りれば、カリスマの日常化のうち、官職カリスマとも世襲カリスマとも呼べるような事態が生じているということができる。

さらに、SA としてのイカンの影響力の及ぶ範囲は、「宗教的」な側面にとどまるものではない。SA は、CFC 全体会議という３つの評議会の主要メンバーが参集する場を監督し、そこで合意に至った事項を最終的に承認することができる唯一の人物である（CFC 1990:4）。全体会議では、各評議会がそれぞれ独自に個別会議を重ねて決定した事項を、CFC 全体で実行すべきかどうか協議される。実際の会議では、まず各評議会の議長（イカンと彼の弟）および彼らから指名された者が、当該評議会の現状、収支決算、新たな案件などを報告する。それらの内容に関して問題がなければ、イカンが音頭をとる「承認の祈り」をもって可決される。あるいは、いくら会議で合意に達した事項であっても、イカンが首を縦に振らない限り、最終的な決定には至らない。こうしてイカンの承認を得た決定事項は、各村落から出席した代表者を介して一般信徒にも伝えられ、すべての CFC 村落で須く実行に移されるのである。

以上のように、CFC が創出した権力構造は、エトを継承したイカン（SA）という宗教的かつ世俗的な指導者を頂点とし、「行政組織と宗教組織が一致するもの」といえる。さらに、イカンの２人の弟は、それぞれが評議会の議長であると同時に、「神聖なる家族（*koburu hopedi*）」と位置づけられており、畏怖・尊敬の対象でもある。とくに三男は「預言者」と呼ばれるなど、エトの霊的な力を少なからず継承しているとされる。これらの名称からもうかがえるように、彼らは CFC の「官僚」である一方で、また「聖職者」でもある。すなわち、現在の CFC の権力構造は、イカンを頂点に彼の２人の弟がその両

脇を固めるという、「『神聖なる家族』による支配」といっても過言ではない。あるいは、宗教をつかさどる組織と社会をおさめる組織が同等の支配形態を有するという意味で、CFC を「神権統治」になぞらえることができるだろう。

おわりに　－今後の課題と展望－

本稿では、ウェーバーのカリスマ論の基本的視座を援用し、CFC の形成史にアプローチを試みた。その結果、CFC の事例は、カリスマの「革命力」から「日常化」へという変遷を示すことが明らかになった。また、その変遷過程でエトが依拠した知識および権力構造は、いずれもキリスト教の知的枠組み、とくに一神教の教理から影響を受けたものであったといえる。こうして CFC は、近代メラネシアの宗教運動史において異彩を放つ「神権統治」による独立教会をつくりあげたのである。

最後に、中間報告書としての本稿の性格を踏まえ、今後の課題と展望を述べておく。以下で述べる２つの点は、ともに「上から下（エトおよびイカンから一般信徒）」に向かって行使される一方的かつ制度的な権力の存在を認めつつも、その一方で、一般信徒が営む日常生活の至る所で作動している微細な権力を視野に入れる必要性を喚起するものである。これらの点に注目することで、CFC の現代的動向をより鮮明に描くことができると考える。

本稿で描いた CFC の権力構造は、１つの中心から放射されるという絶対君主的かつ前近代的な権力イメージに基づくものであった。エトは、キリスト教的な指導・服従の垂直的関係を構築し、個別の伝統的親族集団を超える宗教共同体のうえに君臨する絶対的存在となった。たしかに CFC では、上からの権力が大部分を覆っているようにもみえる。しかし、村落社会に視点を移せば、いわゆる「大文字の権力」だけで説明を尽くせる訳ではない。CFC の成立以降、エトが既存の権力体制を破壊したことによって、「下からくる権力争い」も活発になっている。たとえば、村落レベルでの共同労働は、（親族集団ではなく）労働集団の単位で実施されるが、その集団のリーダー間で主導

権をめぐる諍いが起こることもある。現実的にイカンが姿を現しているときは別として、そうでないときには、ローカルな力関係が社会の断層を形成しているのである。このような視点から、いわば「神権統治」の背景で展開する錯綜したミクロな権力関係を描く必要がある。

また、本稿では、カリスマの変遷にともなう権力のあり方の変容についても論述できなかった。現在の CFC 信徒は、「CFC の法」の遵守をきわめて重要視する生活を送っている。ここでいう「法」とは、信徒が従うべき行動規範や生活様式を意味するものである。具体的には、村落景観や住居形態といった空間利用にはじまり、時間や労働の管理、さらには結婚および性関係など、人々の日常生活に直接関係する規則の総体である。この「法」に基づく規律正しい生活は、メソジスト教会の宣教本部での生活様式をモデルとしたエトが、パラダイス村に持ち込んだのがはじまりとされる。かつてウェーバーは、カルヴィニズムの禁欲的な生活態度は、神への「臣民＝隷従化」を通じて規律化された主体形成であることを示唆した（ウェーバー 1989）。CFC においても、このような形で一定の規範や規律への服従を要求することで、人間の身体（あるいは内面）の管理を対象として従順な身体をつくりあげているのではないだろうか。今後、CFC における「法」と規律権力についても、さらなる研究をおこなう必要があると考えている。

注

1 1968 年、パプアニューギニアとソロモン諸島におけるメソジスト教会と会衆派が統合され、ユナイテッド教会が形成された。その後、1998 年にパプアニューギニアとソロモン諸島のユナイテッド教会が分離し、今日に至る。なお、ソロモン諸島ユナイテッド教会（United Church of Solomon Islands）に関していえば、その圧倒的大多数は、かつてのメソジスト教会員から構成されている。

2 本稿で提示する事例は、筆者の未出版博士論文『メラネシアにおける新宗

教運動の人類学的研究ークリスチャン・フェローシップ教会の形成と展開』（神戸大学大学院、2006 年）に基づいている。

[3] アロソはヤシ科トウ属の一般的総称であるが、ここでいう宗教的意味をもつアロソとは特定の場所に２本の棒を立てそこにロープを張った状態を指す。

[4] 本稿では、聖書からの引用にさいして、『聖書ー新共同訳（和英対照聖書）』（日本聖書協会、2003 年）を参照する。

参照文献

＜日本語文献＞

脇本平也 [1979] 「カリスマ論の諸側面」 （佐々木宏幹編 『現代宗教１－特集・カリスマ』 春秋社, pp.3-15）。

ウェーバー、M. （世良晃志郎訳） [1970] 『支配の諸類型』 創文社。

――――― （大塚久雄訳） [1989] 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』 岩波書店。

＜外国語文献＞

Christian Fellowship Church（CFC） [1965] *The Constitution of the Christian Fellowship Church (1)*. Unpublished.

――――― [1990] *The Constitution of the Christian Fellowship Church(2)*. Unpublished.

Tippett, A.R. [1967] *Solomon Islands Christianity: A Study in Growth and Obstruction*. London: Lutterworth Press.

Tuza, E. [1979] “Paternal Acidity” *Pacific Islands Monthly* 1 pp.8-9.